月丘夢路　芍薬な月付録　|　編・著　一般財団法人　井上・月丘映画財団　|　講談社エディトリアル

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、講談社エディトリアルまでお願いします。
© The Inoue & Tsukioka Movie Foundation　2023　Printed in Japan　ISBN 978-4-86677-123-6

映画

ひろしま

別冊付録

映画『ひろしま』（1953年 日教組プロ製作）

舞台は1953年。終戦から8年後の広島。
市内にある高校で、授業中に1人の生徒が教室で倒れるところから始まります。
当時、被爆地では急性被爆の症状や差別、続く貧困に苦しむ人々が多く存在し、影を落としていました。
物語はやがて、「あの日」、1945年8月6日へと戻っていきます。――――

映画の脚本は被爆した当事者たちの手記をもとに製作され、8万人を超える一般市民もこの映画に出演。
実際の被爆者も多く、衣類やがれきなども当時の物が寄せれました。
しかし、公開直前に映画会社は「内容の一部が反米的である」という理由で上映を拒否。
結局、映画『ひろしま』は自主上映会などで公開されるにとどまりました。
そこから半世紀以上が経過し、いまこの映画が再評価されています。

核の悲惨さを後世に伝えたい。

主演として出演した月丘夢路も、当時からその想いを強く持っておりました。
今回の写真集では、特別付録としてこの映画を振り返ります。

真に原爆の悲劇を二度とくり返してはならない、
という気持ちを伝えたい。
それがあの映画に出ることにつながったんです。

――月丘夢路

母の平和への想い

映画『ひろしま』（１９５３年）は、母が大きな覚悟をもって臨んだ作品です。母の郷土である広島で、8万人を超す市民がエキストラとして参加。原爆投下直後の広島を再現し、母は生徒とともに被爆して死んでいく教師役を演じました。

当時、映画会社松竹の専属だった母にとって、異なる会社が製作する映画への出演は難しいことでした。またこれまで演じてきた役柄とは大きく異なる役柄にも松竹側は難色を示したようです。

しかし戦争を抑止し世界で二度と原爆が使用されないようにするためには、広島の悲劇を世界に広めることが必要だと考えた母は、この映画に大きな意義を見出し、必死で松竹を説得。この1本だけという約束で出演を許可されます。映画会社ではなく日教組プロ（現在のＪＴＵ）の製作で、この仕事を無償で引き受けました。

撮影のために広島を訪れた母は、母校の袋町小学校の変わり果てた姿を目の当たりにします。通学路にあった大きなクスノキの姿は跡形もなく、木造だった校舎は建て直して鉄筋造りになり、子どもの頃、裸足でかけた木の廊下もなくなっていました。撮影日記には「私を知っているのは運動場の砂だけだった」と記しています。

撮影が始まると、実際に被爆した地元の出演者が当時の様子を語ってくれたそうです。映画では、１００人を超える人が折り重なって倒れる地獄絵図のような場面も再現し、母も服が焦げ、顔に火傷を負った教師として生徒とともに川に流されていく様を演じきりました。

この映画は第5回ベルリン国際映画祭で長編映画賞を受賞しながらも、様々な事情から日本では全国公開に至りませんでした。それでも母は出演できたことに心から感謝し、「平和、平和とただ口で唱えるだけではなく、これからも平和のための行動をしよう」と決意します。

その後も広島を訪れ、妹の月丘千秋とともに広島市文化会館で公演を行い、収益金を市に寄付したり、新聞社に義援金を寄付するなどしました。その時に、原爆孤児の厳しい境遇を知り、17歳の女性を「養妹」として支援することをその場で決めます。

彼女は学童疎開で広島市を離れていた時に、広島に残っていた両親と兄姉を原爆で亡くし、戦後は、五日市戦災児育成所から市役所に勤務していました。母たちは彼女が希望していた広島音楽学校の学費を3年間援助し、卒業後は東京の家に家事見習いとして引き取っています。

「どんな理由があろうと、戦争は罪悪です。微力ながら、絶対に戦争には反対です」

いつも穏やかな母でしたが、戦争にだけは毅然とした態度を生涯、貫きました。

製作から半世紀以上が経過し、いま再びこの映画が再評価されています。この映画の監督補佐であった小林太平さんのご子息である小林一平さん、そしてお孫さんの小林開さんが、全国での上映活動を続けておられ、欧米での上映会なども広がりをみせています。２０１９年にはＮＨＫのＥテレにて全国放送もされました。

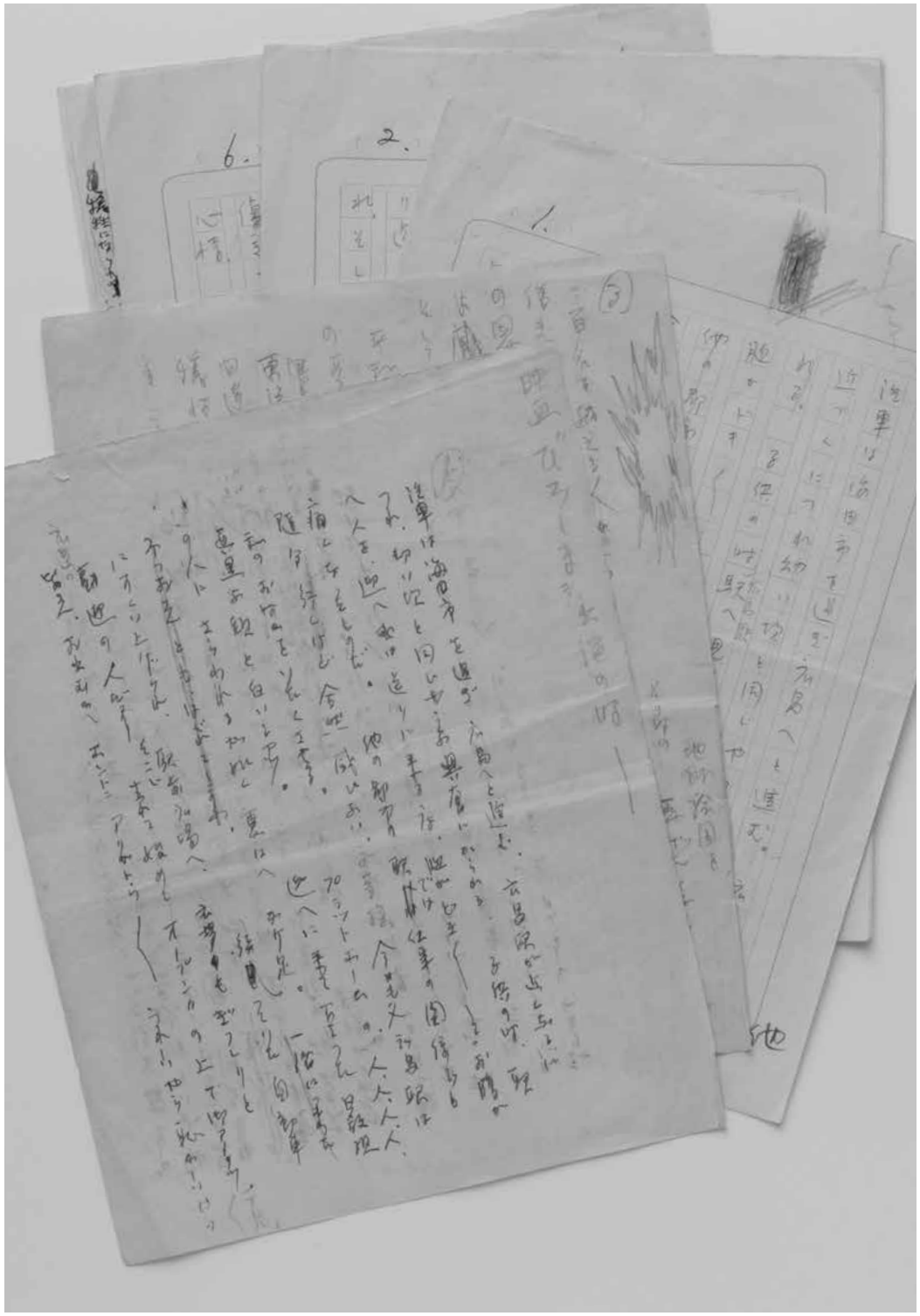
小林さんは「この映画を観ることによって、二度と核を使わせないという思いが芽生えるんじゃないかなと思います」と活動を続けていらっしゃいます。

井上 絵美

当時の撮影日記から

大芝公園という、以前は桜のきれいだった処へセットを作り、いよいよ原爆当日の撮影。
疎開作業中に直射に遭い、私の扮する米原先生が二年生の生徒をひきつれ、燃え続けている町を逃げる場面。服は焦げ顔はやけどで物凄い。実際に直面された広島市民の方が大勢出演して下さり、その日の様子をつたえて下さる。
百名を超える人が一つになって、地獄絵図の再現に心身を打ち込む熱気。
傷つきながらも生徒をかばいながら逃れる先生の心情。亡くなられた私達の恩師を想い、この役をさせていただけたことをほんとうにうれしく思います。
大きな罪悪である戦争を防止するために、現代の最大の武器である原爆の悲劇を、その犠牲となって生命をささげられた恩師先輩方に代わって世界の人々に知らせることは、世界のどこの人々よりも日本人のやるべきことだと思います。
そして二度と地球上で武器として原子爆弾を使うことのない様、平和平和と、ただ口で唱えるだけでなく実際に国際情勢を基盤にした持久性のある真の平和への道の進み方を考えなければならないと思います。
冷静に日本の歩む道を選ぶことこそ亡き霊を慰める唯一の手立てであり、また私達一人一人の務めだと思います。

（撮影日記より一部を抜粋）



絶対に、絶対に見て欲しい。世界中の人に見て欲しい映画です。
なぜなら優れた映画であり、優れたストーリーであり、詩的だ。
そしてこの映画は現代戦争の真の恐ろしさを思い出させてくれます。

衝撃的で独創的な作品です。
出演したエキストラの多くは本当の被爆者でした。
被爆者ならではの描写がたくさんあります。普通はそこまで描けません。
女性の髪の毛が落ちるシーン。後遺症、放射能への不安、映画全体を覆う悲惨さ。
正気を失った男性が妻子を探しまわり、やがて子どもの遺体を見つけるシーン。
とにかく見どころがたくさんある強烈な映画です。
原爆の威力はとかく忘れられがちですから。

記憶は常に忘却との闘いです。常に。
人は思い出したくないものには背を向けるものです。
だから、このすばらしい映画を見て欲しいと伝えています。
あらゆる人に。全世界の人に。

オリバー・ストーン（映画監督）

これは現実なんです。70何年前に起きたこと、これが今も続いている。
だからそれを思い起こさないで忘れたフリをして生きるわけにはいかない。
抑止論だなんだと、色々なそういう戦略的な言葉を使って核の話を進め続けるのではなくて、
もう一度人間にかえって、人間の角度からこのことを考えるには
これ以上の教材ってないんじゃないかしらと思いますね。貴重な、尊い宝のようなものだと思います。

サーロー節子（被爆者、反核運動家）

ＮＨＫＥＴＶ特集『忘れられた「ひろしま」～８万８０００人が演じた〝あの日〟～』
（２０１９年８月10日放送）より一部を抜粋、改変

映画『ひろしま』の無料視聴に関するお知らせ

被爆国日本にとって、二度とこのような戦争を起こさせないという平和理念のもとに、
日本教職員組合の方々が中心となりお金を出し合いました。
そして8万5000人を超える広島市民の全面的な協力で映画『ひろしま』は制作されました。
この悲劇を後世に残すため、当時のフィルムがデジタル化されています。
この機会にぜひご覧ください。

視聴はこちらから

https://inoue-tsukioka.com/inoue-tsukioka-movie/hiroshima/

【注意事項】

＊この動画は財団のホームページを経由して動画サイトに接続されますことをあらかじめご承知おき願います。
＊動画は概ね100分ほどの長さです。再生時に音声が流れますので、音量にご注意ください。
＊お使いの機器により再現度を調整してください。
＊動画のご提供は初期限定として、予告なく変更、終了となる場合がございます。あらかじめご了承ください。
＊動画再生にご不明な点がある際は、お取り扱い機種の説明書をご確認いただくか、メーカーにお問い合わせください。
＊動画は個人の責任においてご利用ください。動画の全部、一部について、再配布・変更・改変を禁じます。

『ひろしま』1953年　監督／関川秀雄　製作／日教組プロ　© JTU日本教職員組合